

令和 7 年度

大阪大学

一般選抜（前期日程）

解答例又は出題の意図

地理歴史（L・F）

2025 年 9 月 8 日修正版

修正箇所：4 ページ目、年号の表記を修正。

令和7年度個別学力検査（前期日程）

地理歴史（L, F） 出題の意図

歴史総合、日本史探究

（Ⅰ）

歴史研究の進展とともに、教科書の記述も少しずつ変わりつつある。その一つの事例となるのが、本設問で問うた墾田永年私財法である。かつての一般的な理解は、墾田永年私財法を契機に律令体制は崩壊するというものであったが、現在ではそうした見方は一面的であることが指摘されている。本設問は、墾田永年私財法の中身と影響を問う極めて基礎的な問題であることもあって、基本的な事項についてはよく書けていた答案が多かった。しかし、本設問で求めた「律令体制との関わりに触れながら」という条件については、あまり十分に触れることなく、単なる事項の羅列に終始する答案も少なくなかった。また、初期荘園に関する叙述について、後世の荘園と混同したと見受けられる答案も複数みられた。設問の意図するところを十分に咀嚼し、基本的な歴史の流れを踏まえた答案が望まれる。

（Ⅱ）

本設問は、中世初頭の仏教界に起こった革新の動きについて、基礎的な理解を問うた問題である。革新の中心となった僧たちとその教えについては、教科書の記述にもとづき一通り書けていた答案が多かった。親鸞や日蓮が多くとりあげられていたが、戒律の興隆にもとづく仏教改革をとりあげてもよいのはもちろんである。教えに共通する特色については、教義や宗教的実践に関するものだけでなく、朝廷や幕府との関わりのある方に関するものをあげても可である。全体的によく書けていたものの、僧名と宗派名を列挙しただけで説明のない答案が散見された。歴史用語をその内容や時代的背景と関連させつつ理解するとともに、それを自分の言葉で記述できるようにすることが期待される。

（Ⅲ）

琉球王国の国際的立場について、近世の日本、明・清との関係のあり方をふまえ、理解できているかを問うた。近世の日本との関係では、薩摩藩の動向が重要であることから、同藩の動向が近世の日琉関係の形成と展開をどのように規定したのかについても言及を求めた。しかし、答案では、島津氏の琉球侵攻にふれないものがあり、ふれたとしても、侵攻の時期を近世後期と述べる答案があるなど、果たして基礎的な学習ができているのか疑問を抱かせるものがあった。また、「中国大陆の王朝」という問題文の文言を

そのまま使用し、朝貢の相手が明から清となることを明記していない答案も目立った。さらに、謝恩使・慶賀使にふれながら、遣使の目的を説明しないか、または説明が逆になっている答案もあった。教科書の扱う歴史用語の意味のみならず、それらの生起した歴史的経緯をも正確に理解しているかを問うているので、そのことを意識し、学習してもらいたい。

(Ⅳ)

本問題は、日清戦争後から中華人民共和国の成立に至るまでの台湾が経験した政治状況について、日本史探究と歴史総合で学んだ知識を関連付けながら、自分の考えを論理的に述べられるのかを問うた。下関条約、日本の植民地統治、中華人民共和国成立前後の各段階の存在については、多くの答案で概ね押さえられていた。しかし、植民地期の台湾を、中国大陆や朝鮮の状況と混同したり、第二次世界大戦後の台湾の状況を、イギリス領香港の政治状況と取り違える答案が目立った。このような混同を避けるためには、各地域や時代の背景を把握し、それぞれの文脈に即して考察する能力が必要となる。

歴史総合、世界史探究

(Ⅰ) (外国語学部・文学部共通)

本問は、史料（同時代のオスマン帝国の詩人が詠んだ諷刺詩）を手がかりとして、18世紀の黒海周辺地域の政治情勢、およびロシア帝国の拡大過程に関する基礎知識を確認することを意図した。

問1

大きな転換期を迎えた18世紀の黒海周辺地域の情勢を問うた。教科書記述のみから解答を導き出すのはやや難しいが、設問および史料に記されたロシア、オスマン帝国、クリミア・ハン国の関係性を読み解き、問われているのが露土戦争（第一次、第二次）であることを導き出せる基礎知識を持った受験者であれば容易であったと見受けられる。

問2

モスクワ大公国とその後のロシア・ツァーリ国が、ユーラシア大陸にまたがるロシアへと成長していく過程についての理解を問うた。モンゴル後継国家の支配下で台頭し、その後、モンゴル諸勢力やコサックを征服・利用しながら東方へ拡大し、極東までたどり着くに至る過程の理解を問うた。

(Ⅱ) (外国語学部・文学部共通)

宋代以降、中国の代表的な輸出品となった陶磁器は、広域的な交易ネットワークの成長やグローバル化の進展をアジアの視点から考えるうえで、極めて重要な題材である。また近年加速する考古学の発掘成果は、中国産陶磁器の交易パターンに加え、中国の周辺諸地域における輸入陶磁器の国産化過程についても、新たな知見をもたらしつつある。中国産陶磁器の輸入代替において、近世～近代の日本はめざましい成功を収めた。その背景として指摘できるのは、豊臣秀吉の朝鮮出兵や清朝の海禁政策（遷界令）、さらに19世紀末の欧米を席卷したジャポニズムといった現象である。陶磁器をめぐる日本史とアジア史・世界史の連関を把握することは、自国史と世界史の一体的理解をめざす「歴史総合」の学習目標にとっても、大きな意味を持つといえよう。

問1は、元朝治下で出現した染付（青花）を導きの糸として、モンゴル帝国時代に活発化したユーラシアの東西交流についての知識を問うた。

問2は、15世紀の東南アジアで中国産陶磁器の輸入が減少し、陶磁器の域内生産が進んだ要因について、明朝の実施した海禁政策との関連で説明させることを意図した。正答率は高く、明朝の対外政策について基本知識がしっかり共有されていることを伺い知

れた。

問3は、17世紀日本における陶磁器の国産化過程と日本産陶磁器の輸出拡大について、歴史的背景を問う問題である。前者は朝鮮出兵を契機とする朝鮮半島からの技術移転が、後者は清朝の発布した遷界令とそれによる中国産陶磁器の流通減少が解答の軸となる。技術移転のルートや遷界令の発出主体・時期などに若干の誤りが見られたものの、全体として出題意図に沿った解答が目立った。

問4は、1870～80年代の日本の陶磁器輸出に関する統計資料をみながら、輸出額推移の背景を問う問題である。表の正しい読み取りを前提に、「世界史探究」および「歴史総合」で登場する基本的な歴史事項について、時系列の正しい理解を求めている。出題にあたっては、「歴史総合」でしばしば取り上げられる万国博覧会とジャポニズムの流行という事象を、陶磁器に結びつけて理解させるよう意図した。

（Ⅲ）（外国語学部）

「歴史総合」の学習のねらいの一つである、現代的課題の形成に関わる近現代史の理解を問う問題としてパレスチナ問題を取り上げた。問1ではシオニズム運動、バルフォア宣言やフサイン＝マクマホン協定、イスラエル建国など、パレスチナ問題の歴史的経緯の理解を、問2では冷戦と湾岸戦争終結後にパレスチナ解放機構（PLO）とイスラエル間で結ばれたオスロ合意（パレスチナ暫定自治協定）と、それが解決できていなかった諸課題（難民帰還、聖地管理、ユダヤ人の入植地拡大など）についての知識を問うた。

（Ⅲ）（文学部）

キタイ（契丹、遼）帝国と北宋が**景德元年**に締結した盟約は、ほぼ対等の「皇帝」をいただく二つの王朝が平和的に共存する国際関係をその後100年間にわたって構築することとなった。この関係は、皇帝の理念的唯一性を前提とする歴代中国王朝の外交方針からみてきわめて特異であり、近世ヨーロッパの主権国家体制に先行するものとして近年のアジア史研究でも注意を集めているだけでなく、新設の「世界史探究」でも中国史上の画期として旧来の教科書叙述が大きく改められた事項でもある。

問1・問2は、如上の歴史展開に関する基礎的知識を問うた。誤答は少なく、高校世界史教育における指導要領の浸透を確認することができた。

問3・問4は、両問を併せて、上記の盟約をはさんだ約200年間の中国世界の歴史的変

遷を説明させることを意図した。遊牧勢力の中原進出とそれへの対応、また盟約締結が中国国内に与えた政治的・経済的・文化的な影響も基礎的事項である。ただし、キタイと金、北宋と南宋を取り違えている答案が少なくなかった。9～12世紀のユーラシア世界史は諸政権・政治勢力の多極化・流動化によって特徴づけられ、まゝ学習者の混乱を招くが、後のモンゴル帝国の大統合の前段階とみなされる時代であり、歴史像を丁寧に鳥瞰してほしい。

地理総合、地理探究

(I)

大問(I)は、西アジアの地誌に関する問題である。問1は西アジア各地における灌漑方法、問2は人口動態の地域差、問3はアラビア半島の海峡をめぐる海運の特徴について、各々問うたものである。いずれも原因・結果や現状・課題などについて、学習で得た知見をもとに論理的に説明することができる力を求めた。

問1

イラク、イラン、サウジアラビアにおける典型的な灌漑方式とその背後にある自然条件・社会条件を問うたものである。各国における国土の位置や地形条件、河川の流路、経済水準などを思考できれば、解答は困難ではない。ここでは灌漑方式とその背後にある諸条件を関連づけて論理的に説明することが重視される。

問2

西アジアに特徴的な、産油国として開発が進み南アジアから多くの出稼ぎ労働力を引き寄せる国々と、経済水準が低く人口転換が十分に進んでいない国々とを対比させ、その人口動態を問うたものである。両国に関する地域理解とともに、社会増減、人口転換といった、人口動態に関わる基礎的な諸概念を理解しているかどうかを重視される。

問3

西アジアを経由する国際的な海運について問うたものである。具体的には、ペルシャ湾岸の産油国から世界各国へ石油タンカーが通過するホルムズ海峡と、スエズ運河を経由しヨーロッパとアジアの間を多様な工業製品が輸送されるマンドブ海峡の特徴と周辺海域の状況に関する理解を問うた。また、2010年代以降のシェール革命についての知識を確認した。

(II)

大問(II)は、ヨーロッパを代表する河川である、ライン川の特徴やその流域に関する問いとなっている。ライン川の流路の地形的成因や国際河川、ブルーバナナについて、自然・文化・経済・社会など、多面的な視点での地理学習の成果が問われているものである。

問1

自然地理の基本的な学習項目である地形やその成因、および具体的な事例の知識があれば解答は難しくなかつたろう。本問の解答では、造山帯・氷河地形・断層（地溝帯）などが重要な要素となる。

問 2

「国際河川」の名称は知っておいてほしい。地理学習においては、「外来河川」などととも、定義・特徴・課題などについての地理的事項や事例の整理をしておくことが期待される。

問 3

本問については、国際河川の特徴・機能・課題を多面的に捉えておく必要がある。水運・水資源・産業・災害・国境・国際協力（国際紛争）などの項目が重要である。解答に際しては、国際河川の流域が広大であるがゆえに、歴史・文化・社会・経済・政治などへの幅広い目配りが必要である。

問 4

ブルーバナナは、世界的にも重要な産業地帯である。その範囲や地域別の産業の特徴、産業の変化など、地理のみならず、政治・経済・歴史の視点からも注目されるべき地域である。解答では、基本的な特徴に関する記述のほか、重厚長大型産業構造からの転換と変化、地域の産業の栄枯盛衰についての記述も為されることが期待される。